



住み続けるほど好きになるまち

取手市長
中村 修 氏

筑波銀行新取手支店長
亀山 智史

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとのつながりを深めるべく取り組んでいます。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県取手市です。筑波銀行新取手支店長 亀山 智史が取手市長 中村 修氏にお話を伺いました。

未来を見据えて挑戦する

2023年4月から新市長として市政を運営しております。私は生まれも育ちも取手ですから、このまちに対する愛情や思いが人一倍強いと自負していますが、市政を担う立場に就いて、取手の良さをもっと引き出したいという思いが一層強まっています。

取手市には魅力や可能性が限りなくあると思っています。常磐線の始発駅があり東京方面へのアクセスが良好、住みやすい住宅エリアをはじめ、緑豊かで家族で週末ライフも楽しめる環境…。私自身、幼い頃から不便を感じたことがありません。

20年程前、市議会議員に立候補するときに、私は「住み続けるほど好きになるまちをつくる」というスローガンをつくりました。

それは今住んでいる人たちが「ずっと住み続けたいまちだよ」と周囲に自慢したくなるまち、その話を聞いた人が「そんなまちに住んでみたい

ね」と思ってもらえるようなまちをつくっていきたく考えたからです。

一方で、少子化や人口減少問題への対応は本市にとっても大きな課題です。こうした中、子育て世代の若者たちに選ばれるまち、そして今住んでいる市民も幸せに暮らせるまちを実現するために、市議3期、県議4期の経験を生かし、市職員や県との連携を図りながら、未来を見据え挑戦する行政運営を進めていきたいと思っています。

多くの人に選ばれるまちづくり

東京が通勤・通学圏内であることに加え、市内に高校が7校あることも取手市の大きな魅力です。

こうした点を踏まえ、本市は子育て支援策の推進と移住促進策に力を注ぎ、誰もが住みたいと思える、暮らしやすいまちづくりを推進しています。

その中の一つとして、定住化促進住宅補助制度「とりで住ま入る（スマイル）支援プラン」を2016年度から実施していますが、今年度からは「結婚新生活支援事業」として、結婚して市内で新生活を始める世帯を対象に住宅取得費や住宅賃借費、引越費用等を補助する制度もスタートさせ



取手市長 中村 修 氏

ました。これらは定住人口の増加という点で確かな成果を出しています。

実際、本市の人口は5年連続で転入超過*となっており、茨城県内でも移住定住者が多い地域です。それだけに移住支援策や子育て支援策を拡充していけば、今後も多くの人口流入が見込めます。

現在、コロナ禍を経て若い世代のテレワークや地方移住への関心が高まっています。そうした中、芸術活動や起業支援といった本市ならではの取り組みを、移住希望者に本市を選んでもらうきっかけにしていきたいと思えます。そして、より多くの人に本市の魅力を知ってもらうためには、市民の皆さんの力をお借りしながら様々な形で情報を発信していくことが重要になります。

※総務省「住民基本台帳人口移動報告」における日本人移動者数



出身のアーティストが小学校を訪れ英語で授業をしていましたが、言葉が通じなくても子供たちはとても楽しそうでした。改めてアートの力と体験の大切さを実感したところです。

農業や伝統技術を支える地域住民とアーティストが一緒に行うプロジェクトもいくつか進行しています。高須地区では、かつて行われていた十二畳と六畳の凧の制作を地域の藁や植物を使って実現し、大空に飛ばしました。

取手市壁画によるまちづくり実行委員会と進める壁画も本市の特徴です。市が主導して制作した壁画だけでも18点ありますが、それ以外にも戸頭団地の建物の壁面に描かれた立体作品も特徴的です。壁画は、市民が日常的に芸術に触れることができるほか、落書きや貼り紙の防止につながり、環境改善や防犯にも大きな役割を果たしています。



「アートのまち とりで」

本市は、1991年東京藝術大学が市内に作った取手キャンパスの開設を機に「アートのまちづくり」を掲げました。その後、1999年にスタートした市民、行政、大学の三者が共同で行う芸術によるまちづくりプロジェクトが「取手アートプロジェクト (TAP)」です。取手のまちをフィールドとして、アーティストの活動支援と、市民の芸術体験・創造活動の仕組みづくりによって、芸術表現を通じた新しい価値観の創造を目指しています。

私自身も市長就任後、このプロジェクトを通じて作品やアーティストとふれあうことで心が弾み、豊かな気持ちになっていく自分を体感しています。

教育面では、小学校でアーティストと子供たちが交流し、本物と出会うことで心の豊かさを育む取り組みも行っています。先日チェコ共和国



また、藝大キャンパスの中では、在学生の作品の小展示や飼育しているヤギとふれあうイベントなども開催しています。藝大食堂という学食は一般の方にも開放されており、私もランチを食べながら学生と意見交換をしたりしています。前学長にバイオリンの生演奏を披露していただいたときは大変感動しました。市民が本物の芸術をより身近に感じ体験できるのも本市の特徴です。

そんなまちの様子に魅力を感じ、取手に移住して活動を続けるアーティストも増えてきました。藝大で学ぶ皆さんには「取手を第二の故郷」と思ってもらえるよう、これからもアーティストの活動支援を継続していきます。

キャンパス内に新たな美術館も開館となります。また、世界中どこからでも鑑賞できる「とりでオンライン美術館」「とりでバーチャル美術館」も公開中。ますます目が離せなくなる「アートのまち とりで」にご期待ください。

「起業家タウン☆とりで」

2016年2月、「起業家タウン宣言」を行い、街全体で起業を支援する取り組みをスタートしまし



起業家特化型支援 レンタルオフィスMatch-hako

た。取手駅西口前の起業家特化型支援レンタルオフィス「Match-hako（マッチバコ）とりで」を拠点に、起業相談、創業スクール、ビジネスプランコンテストなどを実施しています。そして起業した方には「起業家登録カード（Match-card）」を発行しています。

このMatch-cardをこれまでに153枚発行しました。つまり、この事業で153名もの起業家を輩出したこととなります。飲食や小売など幅広い分野で若者がビジネスを学び起業にチャレンジする姿にはワクワクします。

また、働くことの地理的な制約が少なくなった現代社会において、地方で働く選択をする人は増えていくと思います。そうした方々に寄り添い、取手でチャレンジしてもらえる気運を高めたい。金融機関の皆さんとも連携しながら活力ある取手をつくっていきたいと思っています。

新たな活力を生み出す 2大プロジェクト

現在、本市では将来のまちづくりを見据え、二つのビッグプロジェクトが進行しています。

その一つは、まちな顔である取手駅西口のA街区再開発事業です。住宅や商業・公共公益施設などが一体となった複合的な都市施設を整備する計画で、現在、事業化に向けた準備作業を加速化しています。

市としては、地権者の皆さんと協働して、駅前に魅力ある都市空間を創出していくことにより、中心市街地の活性化のみならず、市全体の活力向上や持続可能な発展へと繋げていきたいと考えて



A街区イメージ



求心力を担う活力創造拠点づくり（取手市土地利用基本構想）

います。

もう一つは、桑原地区の土地区画整理事業による新しいまちづくりです。具体的には、関東最大級の敷地規模となる大規模商業施設を核としたにぎわい拠点を整備する計画で、地権者の皆さんと事業協力者であるイオンモール株式会社・イオンタウン株式会社、そして取手市が三者協働で事業化検討を進めております。

この施設は日本最大の商業施設として知られる埼玉県越谷市のイオンレイクタウンを上回る敷地面積（67ha）で計画されています。計画のテーマは「新たな取手の『求心力』を担う活力創造拠点」で、国道6号を挟んで大きく二つのエリアから構成され、「商業空間」「緑・親水の空間」「憩いの空間」「多様な交流空間」を整備していく予定です。

桑原地区の大規模開発は、16年前、私が市議時代に住民の皆さんの声を受け請願に関わった事案でもあります。長年の夢の実現を目前に控えて大変感慨深い思いです。

本市のにぎわい創出と活力アップへの期待を背負う駅西口再開発と桑原開発は、本市の将来的な発展に向けた未来志向の大規模プロジェクトとなっています。

筑波銀行への期待

本市では、市内産業の活性化を進め、安定した雇用の拡大・創出に繋げるため起業支援に力を入れてきましたが、地域経済の発展のためには多様なステークホルダーとの連携が重要だと考えています。円安や資源高による物価の高騰、不安定な世界情勢、新型コロナの感染症法上の5類への移行など、我々を取り巻く環境が大きく変化する中で、筑波銀行には、地域のニーズや企業の特徴に合わせた金融サービスの提供や、地域経済を支え、雇用創出につなげていく取り組みを期待しています。

（取材日：2023年7月28日）



わがまちの環境活動 —取手市—

このコーナーでは、「支店長のわがまち紹介」で取材させていただいた市町村の施策や事業、取り組みなどを紹介しています。

環境活動

取手市は2020年8月3日、茨城県で初めて「気候非常事態宣言」を表明しました。市民の皆さんや学校、企業などと連携しながら地球温暖化の緩和や気候変動への適応につながる取り組みを推進し、二酸化炭素排出量の削減や風水害に強いまちづくりを進めています。

取手市気候非常事態宣言

近年、地球温暖化により世界各地で異常気象が引き起こされ、日本でも猛暑や豪雨、大型台風、それらに伴う自然災害の発生など、気候変動によると思われる影響が全国各地で生じています。利根川、小貝川の流域を抱える本市でも、自然災害は市民生活に多大な被害をもたらす極めて深刻な脅威となっています。そのため本市では気候が既に異常な状況であるとの危機感を市民の皆さんと共有し、地球温暖化対策に取り組む決意として、2020年8月3日「取手市気候非常事態宣言」を表明しました。



詳しい説明はこちらから!!

サステナブル学習プロジェクト

未来を担う子どもたちが持続可能（サステナブル）な未来をつくるための知恵や価値観を育む学習機会として、2022年度から小学4年生及び中学1年生を対象に実施しています。2年目となる2023年度は「とりでおんだんかマスタートライアル2023」と題し、小学校4校と中学校2校の6校をモデル校に指定して実施。「知る」「調べる」など7つのステップで構成、地球温暖化を知ることから始め、自分たちに何ができるかを考え、実際に活動し、その結果を発表することで、温暖化や気候変動への対応について学びます。



取手西小学校での授業の様子

市民環境講座

取手市では、市民一人ひとりの環境問題に対する理解を深めてもらうことを目的に「市民環境講座」を毎年開催しています。2021年度は、一般社団法人日本自動車連盟（JAF）、NPO法人エコレンの皆さんを講師に招き、温室効果ガスの排出を抑え、地球環境に配慮した運転方法を身に付けてもらう「エコドライブ講習会」を開催。2022年度は、NGO法人Peach Other茨城の皆さんを講師に招き、「地球温暖化と海洋プラスチックごみ」についての座学とワークショップを実施。2023年度は、パナソニック株式会社エレクトリックワークス社から、省エネや節電について精通した講師を招き、環境とエコに関する啓発講座を予定しています。



2022年度取手市市民環境講座「地球温暖化と海洋プラスチックごみ」

夏休み探究ツアー in みなかみ

「森をつくる」「森の話を聞く」「森を知る」「森で遊ぶ」「森が育む水で楽しむ」の5つのテーマで構成され、植林体験や自然観察、外来植物の除去作業、レイクラフティングなどを通じて、子供たちの森林や水が持つさまざまな働きへの理解を深める探究型の学習ツアー。2023年8月、市内在住の小学5・6年生を対象に、取手市の友好都市である群馬県みなかみ町で2泊3日の環境学習を実施し、みなかみ町の自然や地域の人と触れ合うことで、取手市との違いや繋がりを学び、それぞれのまちをより良くしていくために一人ひとりに何ができるのかを考えました。



夏休み探究ツアー in みなかみ